

現地校で対応できる英語力とは？

一口に「英語力」といってもその内容は様々です。そこで、まず「英語力」そのものにスポットをあててお話しをしたいと思います。英語力といえば、通常英語による「コミュニケーション能力」というのが一般的に用いられます。英語力があるといえば、「コミュニケーション能力」があるということ、つまり、自分の言っていることを相手に理解させたり、相手の言っていることを理解したりすることができる能力があるということになります。しかし、言語にはこのようにコミュニケーションの伝達手段としてある半面、思考などの抽象度の高い操作を行うときの手段ともなりえます。従って、英語力というと英語による「コミュニケーション力」と「抽象度の高いものを操作する力」ということもできます。

実は、現地校に対応できる、つまり、現地校での学習に対応し成功していくには、「コミュニケーション力」は、もちろんのこと「抽象度の高いものを操作する力」が重要な要因になることは間違いのないことです。カナダの言語学者 Cummins は、生活言語能力/BICS (Basic Interpersonal Communication Skills)と学習言語能力/CALP(Cognitively Academic Language Proficiency)(Cummins, 1989)と二つの概念を使いながら、このことを私達に明快に説明しています。

言語能力には、カナダの言語学者 Cummins によると二種類あるといわれており、これが現在広く認知されています。それは、生活言語能力/BICS (Basic Interpersonal Communication Skills)と学習言語能力/CALP (Cognitively Academic Language Proficiency)です。英語圏における生活言語能力とは、日常生活をする上で必要な英語力のことで、例えば、買い物をしたり、外食したり、道を聞いたりなどの時に発揮する英語力です。一般的に2年(個人差があります)で形成することができるといわれています。一方、学習言語能力は、学業で成功するために必要な言語能力です。例えば、討論、スピーチなどができたり、レポートや教科書を読んだりすることを可能にする能力です。この学習言語能力の育成には5年以上かかるといわれています。

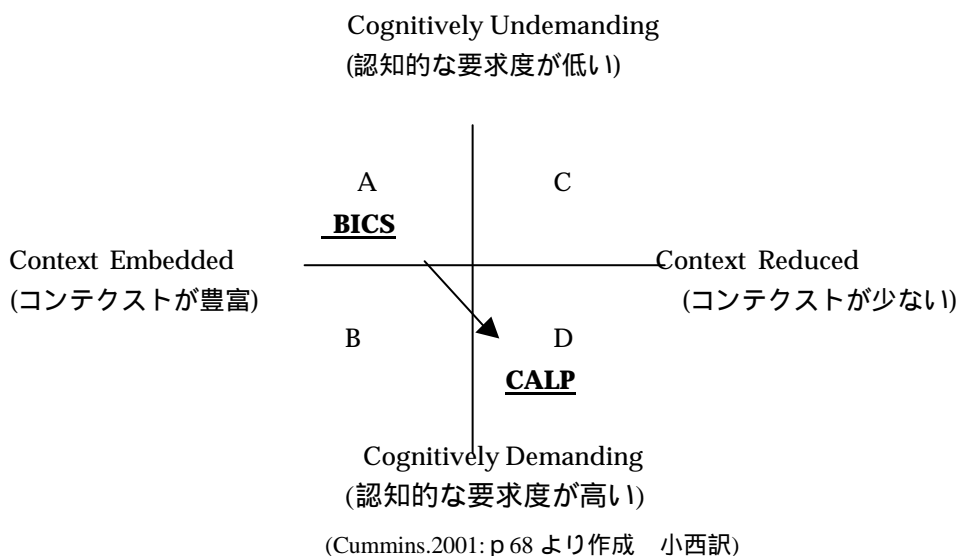
現地校でサバイバルするためには、クラスメイトや先生とコミュニケーションする英語力(生活言語能力)、授業内容を理解し積極的に参加することができるなどの英語力(学習言語能力)の二つの英語力が必要となります。つまり学校という学習する場所では、生活言語能力と学習言語能力の二段階の英語力が必要となるのです。

Cummins は、生活言語能力と学習言語能力の違いを鮮明にするためにコンテキストの豊富さと認知的な要求度という二つの観点を用いて、以下の類型を提案しています。まず、横軸がコンテキスト、縦軸が認知的な要求度です。

コンテキストが豊富ということは、言語以外の情報(身振り、背景、状況等)が豊富で、かつフィードバックが可能であるということであり、コンテキストが少ないということは、言語以外の情報が少ないということになります。つまり、簡単にいいますとコンテキストが豊富な状況というのは、日常生活場面であり、一方コンテキストが少ない状況というのは、学校の授業などということになります。

次に認知的な要求度が高いというということは、相手のメッセージを理解するときに積極的意識的に頭を働かせる必要がある場合であり、認知的に要求度が低いということは、その逆になります。例えば、かけざんなどの四則計算を最初覚える場合、意識的に頭を使って、正しい計算方法

を段階的に覚えていきます。しかし、一方練習をしてかなり慣れていきますと自動的に正しい計算ができるようになります。前者は、認知的な要求度が高く、後者は認知的な要求度が低いということになります。



Cummins によると生活言語能力は A、学習言語能力は D に位置します。生活言語能力は、コンテキストが豊富で、認知的な要求度が低いということになり、学習言語能力は、コンテキストが少なく、認知的な要求度が高いということになります。しかし、生活言語能力は会話のみ、学習言語能力は読み書きとっているものではありません。双方とも読み書きを含んでいます。例えば、生活言語能力でいえば、友だちと E-mail でのチャット、メモ、広告を読むこと、写真や図や表の豊富に入った週刊誌を読むことができるなどということも入っています。

生活言語能力から学習言語能力へ到達するためには、「コンテキストが豊富」で「認知要求度が高い」B 象現を通過する必要があると、Cummins が主張しています。つまり、「学習者のもつ背景知識や興味関心を基礎に、学習内容を理解可能にする手立てを講じ、積極的に学習者の言語使用を励まし、共同学習、ペア学習を取り入れ、トピックを中心とした教材を組織化する」(Freeman& Freeman, 1998.p.76)必要があるということです。

生活言語能力は、子どもたち同士のやり取りの中でわりと自然と身につけていきますが(もちろん個人差があります)、一方学習言語能力の方は、時間とエネルギーをかなり費やさなくてはなりません。学習者の意欲、学習者への長期的継続的サポート(保護者、学校)が必要といえます。つまり、Cummins が指摘しているように生活言語能力を基礎にしながら学習言語能力を育成するためには、学習内容が学習者にとって理解ができるものでなくてはなりません。そのためには、コンテキストを豊富にする、つまり絵、図などといった視覚的なものや日本語でのサポートなどが継続的に必要となります。又、子どもへの精神的な励ましも大事です。現在、現地校に通うお子さんが英語による宿題や授業のわからないところをご家庭で長期的継続的に保護者の方、あるいは塾、家庭教師が日本語でサポートをしている状況を多く耳にしていますが、こういったことが必要となります。このサポートなしでは、現地校でサバイバルすることは非常に困難であるといえるでしょう。

単に日常英会話ができるから、子どもは、大人より英語をマスターするのが早いといったことなどから、それで現地校へということにはなりません。特に現地校の3年生以上になると学習内

容のレベルが高くなり、より高いレベルの学習言語能力が当然要求されます。

下記の表は、現地校におけるランゲージ・アーツの学年毎の学習到達項目数をまとめたものです。「読み」の領域は3年生から、他の「書く」、「話す」、「聞く」、「視聴とメディア・リタラシー」では4年生から学習到達項目数が急増しています。つまり、児童に要求するリタラシーのスキル習得数が増えているということになります。

表1 ランゲージ・アーツ：学年ごとの学習到達項目数

学 年	K	1	2	3	4	5	6
読み	3 5	3 9	2 8	3 6	3 1	4 6	4 7
書く	1 6	2 2	2 9	3 3	4 8	5 1	4 8
話す	9	1 1	1 3	1 2	2 3	2 5	2 3
聞く	5	1 1	5	5	9	1 2	1 2
視聴とメディア・リタラシー	4	9	8	4	1 2	1 9	1 9
合計数	6 7	9 2	8 3	9 0	1 2 3	1 5 3	1 4 9

* (New Jersey Core Curriculum Content for Language Arts Literacy から小西作成)

また、表2は、読み領域一つの分野である「探求とリサーチ (Inquiry & Research)」であり、その分野の中での学年別の学習到達項目を表わしています。この表からみると上記の表と同様に学年が上がるにつれ学習到達項目が増加しており、特に5年生以上になって学習到達項目内容がより、具体的活動から抽象度の高い学習活動へ移行していきます。つまり単なる情報検索、情報収集から、問題意識の設定、深化、それに基づいて多様な情報源にアプローチし、的確な情報を収集しまとめていき、それを基に結論を引き出すという学習活動に入っていくわけですから、これを遂行していくためには高度な学習言語能力が要求されるわけです。

表2 情報の探求とリサーチ (Inquiry and Research) の学年別学習到達項目

	K	1	2	3	4	5	6
1. 教室、図書館、メディアセンターにある様々な本、参考書、百科事典などの場所がわかり、それには目的があるということを知る。	*						
2. 関心のあるトピックに関係している本を選択する。	*						
3. 関心のあるトピックに関する質問をしたり、調べたりする。		*					
4. 収集した情報やデータから結論をひきだす。		*					
5. 多様なジャンルのフィクションあるいはノンフィクションを接し、読む。また、読んだ記録をつけておく。		*					
6. アルファベット順を使いながら情報を検索する。			*	*		*	
7. 様々なジャンルのフィクションあるいはノンフィクションの本を読み、その読んだ記録をつけておく。			*	*			

8. 情報を検索するために図書館の分類システムを使う。				*	*		
9. 自分の好きな著者を調べ、その結果を残しておく。					*		
10. 目的に応じて多様な材料を用いて自分で本を読んで、トピックについてリサーチし、その結果を記録にとっておく。					*	*	
11. 読む前、読んでいる最中、読後といった過程の中で、調べる対象への問いを発展させたり、改訂させたりする。						*	*
12. 関係する情報を検索するために多様な情報源を探し当てる。						*	
13. 多様な情報源から集めた情報から結論をひきだす。						*	*
14. 地図、グラフ、年表、表などといった図表を解釈し使用する。						*	*
15. ノートをとったり、考えをまとめたり、図表をかいたりすることによって情報をまとめたり、整理したりする。						*	*
16. 映像、メディア、テクノロジーを使用してプロジェクトを行ったり、レポートを書いたりする。						*	*
17. 関係する情報を探し当てるために多様な情報源を選択し、使用する。							*
18. 教科書や作品に流れるテーマ、登場人物、場面、考えを比較し、その結果を記録する。							*

(備考) *・・到達項目がどの学年で修得するのかということを表わしている。

* (New Jersey Core Curriculum Content for Language Arts Literacy から小西作成)

以上のことから高学年なるにつれ修得しなければならないランゲージ・アーツのスキル数が増加し、かつその内容がより高度な学習言語能力を要求します。また、それが4学年になって質量とも飛躍的に変化するわけです。このことは、英語が第二言語としている学習者にとっては、かなり負担になっているといえるでしょう。

現地校に通学する子供達のなかで低学年では全く問題がなかったのに高学年に上がるに従って、成績が落ちたり、授業についていけなくなるケースも多いとよく聞くことがあります。上記の表から学習言語能力を育成するために子ども達への学習支援の質、量が十分でない場合、これは当然起こりえるものだということが理解できると思います。

お子さんを現地校へ入学させる場合は、以上のことを十分踏まえておく必要があります。お子さんの学習言語能力を十分高めるために質の高い長期的継続的な学習支援体制をも考えておくことが大切です。大事なお子さんが、アメリカで楽しく豊かな学校生活をおくるためにも。

「現地校で対応できる英語力とは？」に関しまして、ご質問、ご感想、ご意見等がありましたら、ぜひ、メール (info@japaneseschool.org) ください。よろしくお願いいたします。

参考文献とその文献の簡単な紹介

- 1 . Cummins, J. (1981). The role of primary language development in promoting education success of language minority students. In schooling and language minority students: a theoretical framework, 3-49. Los Angeles: Evaluation

Cummins は、この論文の中でバイリンガル教育を考える上でキーになる理論的枠組みや仮説を研究データもとに論じています。

- 1) 生活言語能力 / BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) と学習言語能力 / CALP (Cognitive Academic Language Proficiency)
- 2) 相互依存説 / Interdependence Hypothesis
- 3) 共有基底言語能力 / Common Underlying Proficiency
- 4) しきい仮説 / Threshold Hypothesis

今回は、上記のトピックの関係上 1) のみ取り扱っていますが、今後は 2) ~ 4) を引用しながらバイリンガルあるいはバイリンガル教育の問題を説明していきたいと思っています。

Cummins は、現在トロント大学教授です。彼の理論、仮説は現在のバイリンガル教育に大きな影響を与えています。全米 TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages) や NABE (National Association of Bilingual Education) の大会には基調講演者、パネリストとして活躍されています。

- 2 . Freeman, D. & Freeman, Y. (1998). ESL/EFL principles for success. Portsmouth, NH: Heinemann.

この本は、これまでの言語教授法を検討し、社会的心理的言語的アプローチによる教授法の有効性を述べ、それに基づいて ESL/EFL 場面での授業を成功させるための 7 つのルールを提案しています。そして、この 7 つルールをそれぞれ一つのルールごとに優秀な教師の実践例を元に具体的に展開しています。ちなみに以下が 7 つのルールです。

- 1 . 学習は全体から部分へ移行すること。
- 2 . 授業は、学習者中心にすべきである。なぜなら学習とは、学習者が知識を積極的に構築する活動である。
- 3 . 授業は、学習者にとって意味がありかつ目的があるものでなければならない。
- 4 . 学習とは、社会的交流のなかで生起する。
- 5 . 授業は、読む、書く、聞く、話すといった四つの分野を含んでいなければならない。
- 6 . 授業は、学習者の第一言語や文化を支援するものでなければならない。
- 7 . 授業は、学習者の可能性に信頼をおいているものでなければならない。

Freeman 夫妻は、University of Texas, Pan America で教鞭をとり TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages), NABE (National Association of Bilingual Education), IRA (International Reading Association), IRA (International Reading Association) などの研究大会で基調講演者としても最近は活躍されています。ちなみに本稿著者元教頭 (小西敏勝) 大学院 (Fresno Pacific University/CA)

時代の指導教官でした。

- 3 . New Jersey Department of Education. New Jersey Core Curriculum Content Standards for Language Arts Literacy(http://www.state.nj.us/njded/cccs/s3_la1.htm から 2 0 0 5 年 1 月 1 7 日付ダウンロード)